

令和8年度 比治山大学
現代文化学部・健康栄養学部・短期大学部
一般選抜 C日程 問題

国 語

受験番号	
氏 名	

解答上の注意

1. この問題冊子は、表紙を含み1ページから11ページまであります。
また、解答用紙は1枚です。試験開始後、すぐに中を確認、印刷
や枚数などに不備と思われる点があれば、手を挙げて監督者に知ら
せなさい。
2. 解答は、すべて、解答用紙の所定の欄に記入しなさい。
3. この問題冊子と解答用紙を持ち出してはいけません。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問中に字数制限がある場合、句読点等も字数に含む)

現在、少子化などにより、どの領域でも人材不足が叫ばれており、即戦力が求められています。これに対し、業務を機械化することで、新人でも短期間で一定レベルの仕事ができるようになることが理想とされます。

最新機器を導入しなくてもベテランの経験や勘をデータ化、可視化するだけで、効果はあります。事実、現在実用化されている技術の多くは「知的な処理」ではなく、その一步手前の「データの見える化・共有化」です。これらに「人工知能」という名がつくことはありませんが、今まで可視化されていなかったものがデータとなって共有されるだけでも、かなりの仕事の効率化や省力化ができます。警察官の「あの地区を重点的にパトロールしたほうがよい」、農家の「そろそろシユウカクしたほうがよい」などの判断は、暗黙知や経験値、直感に根差す部分が大きいでしょう。それが数値化やデータ化されることによって、経験値のない新人でも現場の動向を早く把握できるようになります。

(a)、酪農を営む北海道の竹下牧場では、牛一頭一頭の情報が端末にチクセキされているため、従業員が数値に基づいて会話ができるようになったそうです。「最近病気の牛が多い」という経験則ではなく、新人でもデータに基づいて「先月よりもどのくらい病気になった牛がいる」と発言が可能になります。さらには深層学習など、目が誕生したことにより、今まで機械化できなかった作業に機械が導入されるようになります。

新人の育成期間が短いことは、下積み期間が短い、あるいはないという状況です。機械のサポートを得て学びながら作業する形も増えるでしょう。技術の精度が上がれば、将来的には人間はカイザイ③しなくてよくなるタスクも出てくるかもしれません。生産性の向上や効率化には人件費を削るのが手っ取り早いからです。(b)精度が芳しくない技術の移行期や、最終的な意思決定に人間の判断が求められるタスクに関しては、人間は機械との協調、あるいは機械の一部としての役割をもたされるでしょう。何か問題があったときに「非常停止ボタン」を押す係として。

マニュアル化できるタスクは機械化され、マニュアル化の難しい例外処理は人間に残されるタスクになります。機械が汎用的になるのは、まだ当分先でしょうから、特殊な仕事以外は、人間のほうにこそ機械に合わせる「汎用スキル」④が求められます。(c)、機械は定期的にアップグレードされて仕様がかわるので、人間には「適応スキル」も求められます。今後、機械とともに働く人は、仕事をサポートしてくれる機械の判断に頼りながら定型的な業務をこな

すか、マニュアルのない職場で例外処理の対応をしていくことになるでしょう。

C 酪農コンサルタントである安富一郎氏は、昨今の機械化は生身の「牛」ではなく「データ」を見て管理する方向に向かっていること、また「異常検知」という病気の「予防」ではなく「早期発見」を前提にしていることを危惧されています。一般企業に対するコンサルティング業でも、「データを見て問題や無駄な支出を指摘できます。しかし、個別の組織の状況や人間関係を把握できなければ、有効な解決策を提示できないこともあるでしょう。問題を指摘するだけではなく、それを現場での改善として提案できる能力をもっていないとコンサルティング業務は務まりません。」

同様にして、センサーや人工知能などで「目」と「データ処理能力」を得た機械に頼りきってしまい、対象である牛や人を自分の目で見るものがなくなっているのではないかというのが安富氏の問いでした。前述の竹下牧場へのインタビューでも「技術が入ると牛を見る技術の目が失われるという話が必ずあり、それをいわれると悩みます。（中略）そう考えると、逆に新たに「牛飼いまスター」のような専門カテゴリをつくって牛を見る目をもった専門家を確保できるようにしたほうがいいのかなと思います」とのコメントがありました。

機械化や自動化が進むにしたがって、専門的な知識を十分にもたなくても仕事ができるようになります。ミスを犯しても、機械が自動で直してくれるとすれば、自分自身でミスに気づかなくなるでしょう。

誰もが専門知識がなくても機械を扱えるようになる一方で、いざシステムが機能しなくなった場合は高度な専門知識をもつ専門家が必要になるという もあります。たとえば、自動運転車が突如として運転を人間に代わってくださいといった場合に、とっさの判断を人間ができるでしょうか。もし事故やミスがあった場合、人間の手にコントロールを取り戻すことは場合によっては専門家でも難しいかもしれません。飛行機事故の発生理由を調べた調査では、その多くはパイロットが手動での飛行操縦スキルが不足していたからだと指摘しています。二〇〇九年のエアールフランス四七便の墜落事故は、速度計が故障してからわずか四分後に発生しました。機器の想定外な故障に対し、とっさの判断を、専門家であるパイロットですらできなかったのです。このような危惧は人工知能に限らず、自動化、機械化に必ずついて回る問題です。いかにして専門家を育てていくか、コミュニティを持続していくか、そして一般ユーザへの教育を行っていくかも重要です。

（江間有沙『AI社会の歩き方』による。）

問一 傍線部①～⑤の片仮名は漢字に、漢字はその読みを平仮名に、それぞれ改めなさい。

問二 空欄（ a ） （ c ） にあてはまる語を、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。
ただし同じ記号は一度しか選んではならない。

ア また イ しかし ウ つまり エ たとえば オ なぜなら

問三 波線部 A 「効果はありません」とあるが、どのような効果があるといっているのか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア データを活用することで仕事の効率化がなされ、新人でも即戦力になるという効果。
イ 業務を機械化することで、ベテランの経験や勘をデータとして「見える化」できるという効果。
ウ 最新機器を導入することで、可視化されていなかったものをデータとして共有できるという効果。
エ 人工知能の活用により、経験値のない新人でも、現場の動向を早くつかめるという効果。

問四 波線部 B 「下積み期間が短い、あるいはないという状況です」とあるが、どのような状況か。次の空欄を補って説明を完成させなさい。ただし、1 は十字以内、2 は十字で文章中から抜き出して記しなさい。

新人でも、業務の機械化によって 1 の仕事ができるようになっていくが、ベテランのような 2 は身についていないという状況。

問五 波線部 C 「酪農コンサルタントである安富一郎氏」とあるが、「安富一郎氏」の意見として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 酪農現場でも技術が発展し、異常の早期発見が可能になった反面、人間がそのことへの対応に追われる傾向にあることを問題視している。

イ 機械化が進んだことでかえって「生身の牛」が見られなくなりつつあることを懸念し、対象そのものに向き合う感覚の大切さを訴えている。

ウ 生身の牛ではなくデータのみを対象とする現在の管理体制には限界があり、「牛を見る目」をもった専門人材の再育成が急務だと主張している。

エ 機械化が進んだ現在では、一般企業と同様に酪農現場でも、データに基づいて有効な解決策を提示できる能力をもった人材が必要だと指摘している。

問六 空欄

にあてはまる語として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ジレンマ

イ アドバンテージ

ウ ニュアンス

エ インパクト

問七 波線部 D 「このような危惧」とあるが、どのような危惧か。文章中の語句を用いて四十字以上五十字以内で説明しなさい。

問八 この文章の内容に合致するものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 機械の導入が進んでも、業務の効率性は人間の経験や直感に依存する部分が大きい。そのため、自動化の恩恵は限定的である。

イ 北海道の竹下牧場においては、業務の機械化によって従業員が数値に基づいた判断を下せるようになったため、専門人材は不要になった。

ウ 機械化の進展によって仕事のあり方が変化する中で、人間には適応力や機械と協調するスキルが求められるようになってきている。

エ 今後の社会では、ミスの発生自体が予防されるため、人間が自分自身のミスに気づく必要もなくなっていくと考えられている。

Ⅱ

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問中に字数制限がある場合、句読点等も字数に含む)

目の前で繰り返される、不適切な振る舞いに対して「本当はできるのに、やらないだけ」^A「わざと困らせるようなことをしている」と思いたくなるような場面はよくあります。しかしながら実際は、そういった理解が間違っていることが少なくありません。一見すると、「しない」誤学習と見える言動の裏側に実は、知らない、わからない、気づかない、忘れてしまったなどの「できない」^①がヒソんでいることがたくさんあるのです。気になる行動が、「しない」に見えていけれど、実は「できない」だったとしたら、その背景にはいったい何があるのか。それを掘り下げて考えることが重要です。

「しない／できない」を区別する上でもう一つ大切なことは、「過去にできたことがある」という事実だけでは「できる」と判断する根拠として充分ではない、ということ。発展途上な能力やスキルは非常にアンバランスで、その時の状態や環境に大きく左右されます。一度できたら次も必ず「できる」とは限らないのです。「できるのにしない」と言うためには、その人がその気になればいつでも一〇〇パーセントに近い確率でそれができるようになっている必要があります。こう考えると、「しない」のか「できない」のかに迷ったら、「できない」への対応を選ぶのがブナン^②ということになります。そもそも「叱られる人」は多くの場合、まだ未熟で発展途上な人です。ですから〈叱る依存〉への前さばきの基本は、「できない」への対応なのです。

未学習への対応で求められるのは、当たり前ですが です。どうしたら、相手の学びや成長を促進できるのかを考える必要があります。だから本来、「叱る」必要はまったくありません。まだ能力や知識がない人を叱ったところで、できるようにはならないからです。

未学習への対応について、自転車に乗れるようになることを例に説明したいと思います。

学びや成長のサポートを考える上で、最初に重要なのが「レディネス」です。これは学習をするための準備状態を意味する心理学の用語です。レディネスに含まれる条件は発達段階、事前知識(技能)、意欲や関心など多岐^③にわたります。自転車の例で言うならば、自転車に乗れるだけの体の大きさやキンリョク^④が必要ですし、子ども自身が自転車に乗りたいているかどうかも大切です。こういったレディネスの視点は、大人であっても学びの成果に大きくかわって

きます。レディネスが整っていない状態で人は効果的に学ぶことができないからです。

年齢や体格的にレディネスが整っていないお子さんをむりやり自転車に乗せることは少ないかもしれませんが、レディネスがまだ整っていない状態の人に、何かを強制しようとすることは日常적으로よくあります。自転車の場合でも、年齢や体格が相応になったからといって、本人の恐怖心など別の要素でまだレディネスが整っていない、ということがありえます。何かをできるようになってほしいなら、それを学ぶための準備が整っているかどうかを考えなくてはいいません。また整っていないなら、まずはレディネスを整えることを優先することが必要です。基礎となる知識や技術が身についているかどうか、肉体的・精神的に十分な状態に達しているか、本人にモチベーションがあるか、などを見極めなくてはいいけません。

レディネスが整っていることが確認できたら、次は「やり方」を考えることになります。自転車の場合、乗り方を伝えるだけですぐに乗れるようになる場合もありますが、多少のトレーニングが必要になることのほうが多いでしょう。

ここで大切なのは「やり方の工夫」です。

近年、多くの子どもたちが、昔よりもずっとスムーズに自転車に乗れるようになっていくことをご存じでしょうか？ 子どもたちの身体能力が劇的に向上したわけでも、自転車の乗り方そのものが変わったわけでもありません。変わったのは乗れるようになるまでのステップです。昔は自転車に乗れるようになるまでの前段階は「補助輪付き自転車」を使うのがほとんどだったように思います。しかし今は「ペダルなし自転車」が圧倒的に主流になっています。ペダルがなく足で蹴って前に進むので、子どもが恐怖心を感じにくく、バランス感覚が自然に身につくため、そのほうが自転車への移行がスムーズなようです。昔のように怖がったり、何度も転んで泣きながら自転車の練習をする姿は今ではあまり見なくなりました（私自身も自転車に乗れるようになるまでに相当苦勞したので、今の子どもたちをうらやましく思っています）。

このように、やり方を工夫するだけで⑤ヒヤク的にできるようになることはたくさんあります。昔ながらのやり方に固執し、効果的でない努力や根性に頼ることは避けるべきです。もしそうなら、新しい考え方や方法を学び、アップデートしていかなくてはいいけません。

ただし、もう一つ見落としてはいいけない大切なことがあります。それは全員に効果的な方法は存在しないという事実

です。人はとても多様な存在ですので、方法の多様性を確保し、尊重することが大切です。多くの人にとって効果的な方法はありえても、必ずそこから漏れてしまう人がいることを忘れてはいけません。ペダルなし自転車の普及は、多くの子どもをスムーズに自転車に乗れるようにしましたが、それとてすべての人ではありません。バランス感覚や恐怖心よりも、ペダルを漕ぐ動作が苦手なら、昔ながらの補助輪付き自転車のほうが合う可能性もあるでしょう。また、体のバランスを取ることが難しくなるような脳や神経由来の特性により、そもそも自転車に乗ること自体が適していない場合もありえます。そういう人は、自転車以外の移動手段を考えたほうがよいでしょう。

大切なことは、その人にとって合う方法を考え続けることです。努力は大切ですが、合わない方法を強要することは未学習へのサポートとして不適切です。どうせ努力するのなら、その人に合った方法で頑張れるように考える必要があります。

(村中直人『叱る依存』がとまらない』による。)

問一 傍線部①～⑤の片仮名は漢字に、漢字はその読みを平仮名に、それぞれ改めなさい。

問二 二重傍線部①・②の文章中での意味として最も適当なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|----|---|--------|---|--------|
| ① | 相当 | ア | たしかに | イ | 少しは |
| | | ウ | かなり | エ | そこそこ |
| ② | 固執 | ア | 慣れること | イ | 没頭すること |
| | | ウ | 反発すること | エ | こだわること |

問三 波線部 A 「本当はできるのに、やらないだけ」とあるが、そのような誤解をしないために重要なことは何か。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「しない」と「できない」とを区別し、「できない」という言動の背後に「しない」という意志が隠れていることを見抜いたうえで、「できない」という事実よりも「しない」という事実の方を重んじること。
- イ 「しない」と「できない」とを区別し、「できない」と見えることが実は「しない」ことを意味するという事実を深く掘り下げて考えて、過去に「できた」という一過性の事実に頼らないようにすること。
- ウ 「しない」と「できない」とを区別し、「やらない」と見えるその裏に実は「できない」という事実があることを認識しつつ、一度「できた」のだから今後必ず「できる」はずだとその人を応援すること。
- エ 「しない」と「できない」とを区別し、「やらない」のではなく「できない」という事実の背景を深く考えるとともに、一度「できた」ことはいつも「できる」はずだと軽率に判断しないように注意すること。

問四 空欄

にあてはまる語句として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「できるようになる」ためのサポート
- イ 「できるようになる」ための叱り方
- ウ 「できない」人への厳しい指導
- エ 「できない」人への深い同情

問五 波線部 B 「整っていないなら、まずはレディネスを整えることを優先することが必要です」とあるが、それはなぜか。その理由が述べられた箇所を、文章中から三十字以上三十五字以内で抜き出して記しなさい。

問六 波線部C「近年、多くの子どもたちが、昔よりもずっとスムーズに自転車に乗れるようになっていいる」とあるが、それはなぜか。文章中の語句を用いて五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問七 波線部D「見落としてはいけない大切なこと」とあるが、どのようなことか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア すべての人に効果がある方法は存在しないという事実を踏まえながら、多くの人に効果的な方法があれば、うまくできない人にもそれを適用してみようとする。
- イ 個々人に合ったやり方を探すこともたしかに大切ではあるが、その前提としてあらゆる人にとって有効なやり方などないという事実をしつかりと認識すること。
- ウ 昔ながらの方法でやることは一切やめて、一人一人の個性を尊重しつつ、その人にとって効果的な、かつ新しくより良い方法を常に探し続けてあげること。
- エ 例えば自転車に乗ることができない人がいたならば、たとえその原因がその人の先天的な身体特性によるものであっても、その人が自転車に乗れる方法を考えること。

問八 この文章の内容に合致するものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 未学習者への適切な対応は、むやみに人を叱ることから脱却するための基本となる。
- イ 学習の準備状態が整っていない人に何かを強制することは、非日常的な悪行である。
- ウ レディネスが整って「やり方」を考える段階に達すれば、一般的にトレーニングは必要なくなる。
- エ その人に合わない方法を強要することも本人が努力することも、ともに無意味な行為である。